

第63回日本人間ドック学会学術大会

去る9月2日、3日に第63回日本人間ドック学会学術大会が開催され、当クリニックから以下の一般演題3題とポスター発表1題を発表いたしました。

【一般演題】

- ①人間ドック受診者全員を対象とした視野検査導入から10年の経過 …副院長 森山 優
- ②人間ドックにおける多発性のう胞腎のスクリーニングの重要性 …検査部 塚田 こず恵
- ③聴力と生活習慣病の関係 …検査部 高橋 千草

【ポスター発表】

- ・コロナ禍における当院の先進的・効果的取組についての報告 …総務企画部 亀谷 招弘
- 今回は上記③について、発表した内容を右ページに掲載いたします。

難聴とフレイル ユニバーサル・サウンドデザイン 聴脳科学総合研究所 所長 中石真一路

当クリニックでは、新型コロナウイルス感染症対策による「声の聞こえづらさ」改善のため、スピーカー(comuoon)を導入しています。comuoonの開発者の中石先生の難聴に関する記事をご紹介します。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、マスクやアクリルパネル越しでのコミュニケーションの機会が増えた方も多いと思いますが、相手の音声十分に聞き取れない経験をされた方も少なくないのではないのでしょうか。音が聞こえにくいことでどれほどコミュニケーションの弊害となるのか、聞こえのストレスを身をもって体感されたのではないかと思います。今回は、難聴とフレイル(※)について解説します。

※フレイル：加齢により、心身が衰えた状態のこと。虚弱。

難聴がもたらす影響には、下記のようなものが考えられます。

- ・周囲とのコミュニケーションが難しくなる
- ・好きだったテレビを急に観なくなる
- ・部屋に引きこもることが増える
- ・相手に悪いと思い、聞こえたフリをする



このように難聴が発症すると、周囲から認知症や身体機能の低下「フレイル」と勘違いされやすくなります。難聴に関しての知識を得る機会も少ないことで、難聴か認知症なのか周囲にはわかりにくく、家族が軽度認知障害と誤認しているケースも見受けられます。

また、難聴のために外出が億劫になってしまい身体的なフレイルと誤認されることがあります。先入観で認知症やフレイルと決めつけるのではなく、聴覚の衰えが要因となって活動性が低下することがあると認識をしておく必要があります。

つまり、これらを理解し、早めに聴覚機能の低下に気付き、適切な対応をすることでコミュニケーションが改善され、自身の生活の質維持に繋がります。

超高齢社会となり、難聴に関する正しい知識を学ぶことが大切になっていると感じ、YouTubeチャンネル「もじゃもじゃ先生の耳研究所」を開設し、聞こえについて楽しく学ぶための機会創出にも力を入れています。ぜひご活用ください。

ヒアリングフレイルとは？

<https://u-s-d.co.jp/hearingfrail/>



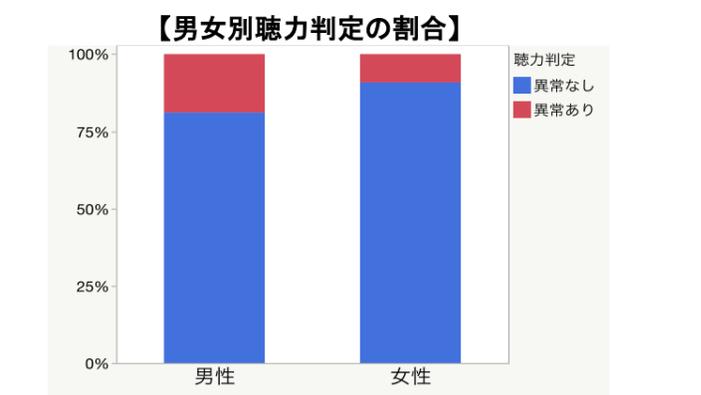
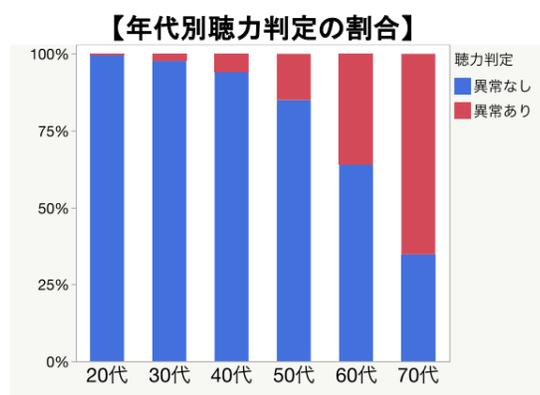
聴覚と生活習慣病の関係

聴力検査は難聴を調べる検査であり、人間ドックの基本検査項目に含まれています。一般的に、聴力が年齢とともに低下することは知られていますが、聴力の低下にどのような因子が関連しているかはまだ明らかにされていません。

そこで、当クリニックの2019年度の人間ドック受診者を対象に、聴力検査の結果と生活習慣病の関連性を検討しました。

当クリニックの2019年度の人間ドック受診者は37,576人でした。年代別では40~50代の割合が多く、男女比は約6:4でした。(聴力の検査環境は遮音室、機器はRIONのオーディオメータAA-47を使用しています。)

聴力検査の判定は1000Hzと4000Hzの周波数で左右の聴力検査を行います。今回は、全てを30dB以下の音圧で知覚できれば「異常なし」、どれか一つでも30dBより高い音圧でないと知覚できなければ「異常あり」としました。聴力に「異常あり」と判定されたのは全体の14.8%でした。聴力に異常があった人の割合は女性より男性の方が多く、男女ともに年齢が高くなるほど「異常あり」の人が増えている結果となりました。



次に年齢・性別・肥満判定・生活習慣病(高血圧、糖尿病、脂質)と聴力の判定を分析し、生活習慣病と聴力に関連があるかを検討しました。すると、糖尿病判定と肥満も有意に聴力判定に関連することが示されました。

【糖尿病検査判定異常なしの人と比較した聴力検査異常ありのオッズ比】

糖尿病判定	判定区分	オッズ比
軽度異常あり	B	1.11
異常あり	C, D	1.22
治療中	E	1.53

次に糖尿病の重症度によって聴力にどのように影響するかを検討しました。今回は人間ドック学会の糖尿病判定を用いて、B判定を「軽度異常あり」、C判定(要経過観察・要再検査)とD判定(要精密検査・要治療)をまとめて「異常あり」としています(A判定：異常なし、E判定：治療中)。糖尿病検査で異常がなかった人に対し、異常があった人が何倍くらい聴力異常ありと判定されたかを調べたところ、「軽度異常あり」では約1.1倍、「異常あり」では約1.2倍、「治療中」の人では約1.5倍と、糖尿病の判定が重くなっていくにつれて聴力異常ありの人数が増えていることがわかりました。(表1)

これらのことから、糖尿病判定が重くなるにつれて聴力判定が「異常あり」の人が増加する傾向にあり、糖尿病の重症化予防が聴力にも影響を及ぼす可能性が示唆されました。

検査部 高橋千草

健康相談室だよりは当クリニックホームページにも掲載しております。バックナンバーもご覧いただけます。

\*\*ご意見・ご要望等ございましたら、遠慮なくご連絡ください\*\*  
 ホームページURL : <https://www.omiyacityclinic.com/>  
 ご意見・ご感想 : [sodan@omiyacityclinic.com](mailto:sodan@omiyacityclinic.com)

